

論文の概要

読譜能力は音楽演奏において基礎的でありかつ重要なものである。これまでの読譜能力に関する縦断的研究の多くは、幼児・児童を対象としたものであった。また、青年期以降の大人の音楽初学者の読譜技能がレッスンを通してどのように発達し、変化していくかについては、いまだ明らかにしていない。そこで本研究は、青年期以降の大人に対して総合的な音楽レッスンを行うことにより、読譜技能においてどのような向上が見られるのかを調べた。実験1は実験2で提示する適切な疑似楽譜刺激を選出するために行った。その結果、初めて総合的な音楽レッスンを受ける初学者に対しての適切な刺激を選出した。実験2ではこれまで専門的な音楽レッスンを経験していない大学生を読譜経験高群、読譜経験低群の2群に分けて2ヶ月のレッスンを行い、その前後の疑似楽譜再生課題の成績を比較した。さらに統制群として、疑似楽譜再生課題を2ヶ月の間を挟んで2回行う群を設定した。その結果、読譜経験高群・読譜経験低群は、ほとんどの刺激において音楽レッスン後の成績が向上した。しかし統制群に関しては、2回の実験に大きな変化は見られなかった。また、参加者の読譜経験によってレッスンの影響が異なることが示された。読譜経験低群においては、視覚刺激に対する全体的な処理に発達的变化が見られ、更に音楽レッスンで得られた知識は、音楽レッスンでは扱っていない刺激に対しても転移された。読譜経験あり群においては、刺激を符号化する段階において、視覚的符号化に加えて音響的符号化を行うといった処理水準の深まりが見られた。